第三講　演習問題(3)

次の文章は、江戸時代の怪異小説集、林九兵衛『玉櫛笥（たまくしげ）』の一部である。ある男が、老婆に連れられて、ある女性を覗（のぞ）く場面から始まる。これを読んで、あとの問いに答えよ。

うれしさかぎりなくて、跡につきて行く程に、かの妻戸の奥なる障子（しやうじ）の破れよりのぞきてみれば、御前（おまへ）には灯火（ともしび）いとあかかりけり。まぎるべきやうもあらず、よく見えたり。かの后（きさき）のうつくしさ、言の葉もいひがたし。しばしありて、障子の内（うち）より十二三ばかりの女、赤きあこめ着たるが一人出でて、御前の灯火をらふそくにうつして、妻戸のあひへ出て、御廊下の縁（えん）の石におきぬ。花のひかりもかかやきて、月の夜よりもなほ見所おほき心地して艶なり。

后の、花の散るを見いだし給ふ御さま、いふばかりなく見え給ふ。[1]表（おもて）の方（かた）は、なほうしろめたくやおぼすらん、わがのぞくかたは、おほかたなれば、人ありとも覚（おぼ）しめしよらぬにや、灯火近くめしよせ、障子の色紙の歌など①御覧ぜらるる。「今ぞ御顔はよくみたてまつりけり。あさ夕つかふ人だにも、かばかり御前ちかくは［A］」と尼のいふにぞ、いとうれしくて見る内（うち）にも、わがこころのはては何となるべきと、我が心からいぶせく、[2]また世に似たるといふ人もあらじとかなしく、こ

の御すがたをいつの世に忘れんと、たましひもなき心地(ここち)して、いかがせんと思ひわづらひ、時うつりけるも覚えず、②ながめゐたり。

　やや久しくありて、おもてのかたに[3]車のきこゆ。すは中将とおもふところに、灯火をあふぎけちて御簾(みす)おろしければ、ありつるらふそくの火、ほのぼのと見ゆるばかりにて、[3]車の音も表(おもて)を過ぎければ、もしあらぬ人にや、と聞くに、[3]車おしまはす音して、ありつる築地(ついぢ)のくづれとおぼしきところより、[3]車をとどめて、そこより人の③入るおとしてきこゆれば、[4]かの尼のいひし歌もここぞかし、今も築地のくづれよりかよひ給ふよ、関守(せきもり)はなきやらんと、むかし忘れ給はぬこと、をかしく、尼のいひしこと思ひあはせて不思議なる。

　さてもいづかたより上がり給ふとも覚えぬに、はや妻戸のうちへ人のさし入るけしき見えてければ、これぞ在五中将のおはしまし、后にしのびてちかより給ふなりと見る所に、さきの十二三の女、いそがしく灯火を持ちかよふとて、いかがしたりけん、あやまちてそばにかかりたる御きぬにとりおとし[5]しかば、やがて燃えつき、あはやと見る内に、俄(にはか)に嵐(あらし)はげしく屏風障子に吹きつけ、おびたたしく燃えあがり、炎(ほのほ)四方(よも)に飛び散りて、煙(けぶり)立ちおほひければ、業平も后も[6]炎の中にて消え失せ給ふ。

人々おどろき、泣き叫び、逃げまどふ。武平次、興さめおどろき出づるに、方角を失ひ、垣（かき）をやぶり築地を越えて、歩（あゆ）むともなく、ころぶともなく、走り帰り、やうやう夜の明け方に平野（ひらの）のほとりまで逃げ出でたり。ここにて息つぎ、休みて、いかに焼けあがりて民家（みんか）騒（さわ）ぐらんと、また元（もと）の道に戻り、雲林院（うんりんゐん）の方（かた）へ行くに、人すこしも騒がず、焼亡（せうぼう）のけしきもなし。あやしみながら、ゆふべの古御所（ふるごしよ）を尋ぬるに、あとかたもなし。

急ぎ立ち帰り、太田道灌入道に逢ふて、かうかうの事ありしと語る。道灌まゆをひそめ、「先年、赤松美作守（あかまつみまさかのかみ）といふ人も、雲林院のほとりにおいて、かかる怪異（けい）を見しと聞きつたふ。これ業平、二条の后の幽霊なるべし。業平、后のただ人にもあらず、帝にまゐり給へるを、ひたすら忍び、かたらひ給へる邪淫（じやいん）の罪によりて、なほ今の世までも同じ思ひの炎にこがれ、ともに苦患（くげん）をうけ給ふ輪廻（りんゑ）のほどこそ浅ましけれ。さればつらつら④思ふに、伊勢物語に書ける業平一生の所行（しよぎやう）を、初学（しよがく）の人あしく心得（こころえ）、艶にやさしきふるまひなりとうらやみ、好色（かうしよく）の方人（かたうど）とし、陰陽（いんやう）の神なりとあがむるは、いかばかりのあやまりぞや」とて、これより7みづからもたやすく伊勢物語の沙汰せられざりしとかや。

問一 傍線部１「表の方は、なほうしろめたくやおぼすらん」の説明として、最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　障子に破れがあるのが不安である。
ロ　色紙の歌が読めるか心許ない状態である。
ハ　尼君が歌の説明をしてくれるかわからない。
ニ　外の方から男の人に覗かれるのが不安である。
ホ　玄関から中将が来るかもしれないのが不安である。

問二 空欄 A に入る最も適切な言葉を次の中から一つ選べ。

イ　見ず　　ロ　聞かず　　ハ　見奉らず
ニ　聞きつらん　　ホ　見奉りたり

問三 傍線部２「また世に似たるといふ人もあらじとかなしく」とあるがなぜか。その理由として、最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　女性を見るうちに出家心が芽生えたから。
ロ　自分の和歌の力量にあきらめが付いたから。
ハ　このような美しい女性を見ることができたから。
ニ　自分と同じ人間はこの世にいないと悟ったから。
ホ　このように美しい女性がこの世の者ではないから。

問四　傍線部①～④の動作主体として最も適切なものを、それぞれ次の中から一つ選べ。

イ　后　　ロ　尼　　ハ　武平次
ニ　太田道灌　　ホ　在五中将

①＝　　②＝　　③＝　　④＝

問五　傍線部３「車」が四箇所に出て来るが、それぞれどのような関係にあるか。その説明として、最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　すべて同じ車を指している。
ロ　一番目の車と、それ以降の車は異なる。
ハ　四番目の車と、それ以前の車は異なる。
ニ　一、三番目の車と二、四番目の車は異なる。
ホ　一、二番目の車と三、四番目の車は異なる。

問六　傍線部４「かの尼のいひし歌」として最も適切な和歌を次の中から一つ選べ。

イ　春日野のわか紫のすり衣しのぶのみだれかぎり知られず
ロ　人しれぬわが通ひ路の関守はよひよひごとにうちも寝ななむ
ハ　月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして
ニ　白玉かなにぞと人の問ひしとき露とこたへてきえなましものを
ホ　おきもせずねもせで夜をあかしては春のものとてながめ暮らしつ

問七　傍線部５「しか」と文法的に同じ「しか」を含む用例はどれか。最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　見ざらましかばと思さる
ロ　しかおはしましあへるに
ハ　さてはいみじくとこそ覚えしか
ニ　見聞かずだにありにしかなと思ふに
ホ　なかなかになにしか人を思ひそめけむ

問八　傍線部６「炎」の説明として、最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　帝が業平と二条の后を恨んで燃やす嫉妬の炎である。
ロ　灯火を煽いで消そうとして御簾に燃え移った炎である。
ハ　武平次が古御所で夜に見た、夢の中の輪廻の炎である。
ニ　十二三の女がわざと灯火を落として燃え上がった炎である。
ホ　邪淫の罪により、何度も業平と二条の后を燃やす炎である。

問九　傍線部７「みづからもたやすく伊勢物語の沙汰せられざりしとかや」の意味として、最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　自分からすすんで伊勢物語を読むようになったとかいうことだ。
ロ　自分でも軽々しく伊勢物語の講義などをしなくなったとかいうことだ。
ハ　自分でも容易に伊勢物語を好色の本と言わなくなったとかいうことだ。
ニ　自分でも軽々しく伊勢物語を仏教の書とは言わなくなったとかいうことだ。
ホ　自分からすすんで伊勢物語を仏教の書としてみなすようになったとかいうことだ。

第三講

〔解答〕

問一 ニ　**問二** ハ　**問三** ハ
問四 ① イ　② ハ　③ ホ　④ ニ
問五 イ　**問六** ロ　**問七** ハ
問八 ホ　**問九** ロ

〔現代語訳〕

（男〔＝武平次〕は）うれしいことこの上なくて、（老婆の）後について行くときに、その妻戸の奥にある障子の破れたところからのぞいて見ると、御前には灯火がとても明るく灯っていた。見間違えようもなく、よく見えた。その后の美しさは、言葉では言い尽くせない。しばらくして、障子の中から十二、三歳ぐらいの女で、赤い衵を着ている女が一人出て来て、御前の灯火をろうそくに移して、妻戸の間へ出て、御廊下の縁の石に置いた。花の美しさも輝いて、月の夜よりももっと見所の多い気がして優美だ。

后が、花が散るのを見ていらっしゃるご様子は、言葉で言い表せないように見えなさる。外の方から（男の人に覗かれないかと）やはり不安に思いなさっているのだろうか、自分が覗いている方は、普通のところなので、人がいるとも思いもよらないでいらっしゃるのだろうか、灯火を近くに取り寄せ、障子の色紙に書いてある歌などを（后は）ご覧になる。「今、お顔はよく拝見しました。朝夕お仕えする人でさえも、これほど御前近くでは拝見しない」と尼が言うので、（男は）たいそううれしくて見るうちに、自分の心は最後にどうなってしまうのかと、自分の心ながら気がかりで、またこの世に似ているという人もいないだろうと愛しく、このお姿をいつ忘れることがあろうかと、分別も失うような気がして、どうしようかと思い悩み、時間が経つのも忘れて、（男〔＝武平次〕は）眺めていた。

やや しばらくして、表の方で車の音が聞こえる。そら中将（がいらした）と思うところに、灯火をあおいで消して御簾を下ろしたので、先ほどのろうそくの火は、ほのかに見えるだけで、車の音も表を過ぎたので、もしかして別の人だろうか、と聞くと、車がいらっしゃる音がして、先ほどの築地の崩れと思われるところから、車を止めて、そこから人〔＝在五中将・在原業平〕が入る音が聞こえるので、この尼が言っていた歌もここだよ、今も築地の崩れから通いなさるよ、関守はいないのであろうかと、昔を忘れなさらないことが、おもしろく、尼が言ったことを思い合わせて不思議である。

それにしてもどこからお上がりになるともわからないが、すでに妻戸の中へ人が入る様子が見えたので、これこそ在五中将がいらっしゃり、后に密かに近寄りなさる様子であると見るところに、さっきの十二、三歳の女が、忙しそうに灯火を持って来ようとして、どうしたのだろうか、誤って側にかかっていた御衣に落としてしまったので、すぐに燃え尽き、あれよと見ているうちに、急に激しく嵐が屏風障子に吹き付け、激しく燃え上がり、炎が四方に飛び散って、煙が立ち覆ったので、業平も后も炎の中で消え失せなさる。人々は驚き、泣き叫び、逃げ惑う。武平次は、我に返って驚いて出るが、方角を見失い、垣根を壊し築地を越えて、歩くともなく、転ぶともなく、走り帰り、やっとのことで夜明け頃に平野の辺りまで逃げ出した。ここで一息入れて、休んで、どんなに焼けて民家が騒いでいるだろうと、また元の道に戻り、雲林院のほうへ行くと、人は少しも驚かず、焼失した様子もない。不思議に思いながら、昨夜の古御所を訪ねると、跡形もない。

（武平次は）急ぎ立ち帰り、太田道灌入道に会って、かくかくしかじかのことがあったと語る。道灌は眉をひそめて、「先年、赤松美作守という人も、雲林院の辺りで、このような怪異を見たと聞き伝えている。これは業平と、二条の后の幽霊に違いない。業平は、后が普通の身分ではなく、帝に入内なさっていたのを、ひたすら人目を忍んで、親しくなさった邪淫の罪によって、なお今の時代までも同じ思いの炎に焦がれ、ともに苦患を受けなさる輪廻の様子が驚きあきれる。そういうわけで（私〔＝太田道灌〕は）つらつら思うと、『伊勢物語』に書いてある業平一生の所業を、初学の人が間違って理解し、優美で風雅な振舞だとうらやみ、色好みの味方とし、陰陽の神だとあがめるのは、どれほどの過ちであることか」と言って、これ以降自分でも軽々しく『伊勢物語』の講義をなさらなかったとかいうことだ。